

はじめに

いまから50年ほど前となる1964年に、東京で第18回のオリンピックが開催されました。日本のスポーツ界に科学が導入されたのはこれが契機とされています。以来、スポーツにおける科学研究は大きく発展してきました。

しかしその一方で、現場で日々試行錯誤する選手やコーチにとって直接的に役立つような「実践研究」は、その発達が取り残されてきた感があります。2020年に二度目の東京オリンピックを迎えるにあたり、私たちはこの領域の基盤を固め、かつ発展させることが求められています。

科学研究では厳密さや普遍性を追求します。一方、実践現場では、厳密さよりも現実的・即時的な解決を求められ、普遍性よりも個別性の方が重要となります。そしてその答えは、従来型の科学研究だけでは導くことができません。

このような背景をふまえて、2009年に、本テキストの著者の一人である福永の提唱により、『スポーツパフォーマンス(SP)研究』が創刊されました。2015年には、実践研究のできる博士を養成するために、筑波大学との間で大学院共同学位プログラム、2016年からは「大学体育スポーツ高度化共同専攻(3年制博士課程)」が設置されました。

ただし課題はまだ多くあります。たとえば、実践研究の論文を書こうとしてもなかなか書けなかったり、ようやく書いても査読者とのやりとりがうまくいかず却下されてしまう、という問題があります。この要因として、実践研究の定義やあり方が不明確であったり、従来型の科学研究の書き方との違いが曖昧である、などがあげられます。そこで、実践研究の定義、あり方、書き方を少しでも明確化したいと考えて作成したのが本テキストです。

従来型の科学研究では、長い伝統の上にその作法が確立しています。これに対して実践研究の場合は、その考え方に個人差があったり、対象分野によっても違いがあります。そこで本テキストでは、『SP研究』の創刊者であり、本共同専攻の設置を先導した元鹿屋体育大学学長の福永、同大学院における実践研究の授業を担当する教員のうちで、『SP研究』の編集委員長を務める高橋、副委員長の金高、山本、そして日本スポーツパフォーマンス学会の会長を務める前田の5名が、「私の考える実践研究のあり方」といったスタンスで、自由に執筆してみることにしました。

このテキストで問題の全てが解決するわけではありません。しかし少なくとも、実践研究に対する認識の共通点や、細部での相違点などが浮き彫りとなるでしょう。それを踏まえることで、これまでよりも論文の執筆がしやすくなると同時に、査読者にとっても共通の指針となり、両者の間で起こりがちな齟齬を少なくすることにも寄与できると思います。

本テキストに示された考え方をたたき台として、今後さらに論文を蓄積していくことにより、実践研究のあり方(パラダイム)がより明確になっていくでしょう。また本テキスト自体も、今後も少しずつ執筆者を増やすなど、徐々に充実させていきたいと考えています。忌憚のないご質問やご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

平成29年3月 吉日

著者一同